
悪夢

狸小屋

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪夢

【Nコード】

N5015A

【作者名】

狸小屋

【あらすじ】

僕は酷い悪夢で目覚めた。それは僕が殺される夢。それはあまりにもリアルで、まるで現実の光景のようだった。あれは、本当に夢の中の出来事だったのだろうか？

酷い夢にうなされて、僕は目覚めた。

汗で衣服は肌に張り付き、口の中はすっかり乾ききってしまった。た。

まだ恐怖から抜け切れていないのか鼓動は高鳴ったままだ。

僕はさっきまで見ていた恐ろしい情景を思い返す。

夢？あれは本当に夢だったのか？あまりにもリアルな光景でいまだに頭に焼き付いている。

それは、僕が殺される夢だった。

その夢は、僕がキッチンで男と口論になったところから始まる。顔を紅潮させて怒りを露にする僕。

口論が続くうちに、徐々に立場は僕のほうに有利になっていく。

そして男は口論の結果、僕にぼろぼろにやり込められてしまい、怒りの頂点に達した男は台所にあった出刃包丁を手に取り、そのまま僕の頸動脈を思いっきり切りつけたのだ。驚きと恐怖の入り混じったこれまでに見たことの無いような表情を浮かべる僕。

その首筋から噴出す血飛沫。僕は条件反射のように素早く手で首筋を押さえたが、そんなことはまるでおかまいなしに、押さえた指の隙間から血はあふれ出していた。

そして僕は膝から崩れ落ち、そのまま頭を床にたたきつけて動けなくなった。

夢はそこで終わる。

細部に至るまでまざまざと思い出すことができ、僕はその光景の生々しさに少し気分が悪くなった。

だが、僕はこのリアルな夢に一つ妙な点があることに気がついた。

夢の中での僕の視点は、なぜか『殺される僕』の視点ではなく、何故か『僕を殺す男』の視点であるということである。その点だけがリアルさに欠けているのだ。

そこまで真剣に考えて、僕はふと笑ってしまった。

何を自分は真剣になっているのだろうか。夢などというものはだいたいそんなものではないのか。夢の世界に論理を持ち込んでも無駄だ。

早く顔でも洗って、嫌な夢など忘れてしまおうと思い布団から抜け出そうとしたとき、僕はぎよっとした。

自分の衣服が真っ赤な血に染まっていたのである。衣服が汗で張り付いていると思っていたのは、まだ乾ききっていない生々しい血糊のためであった。

僕は戦慄するとともに、夢と現実が交差したかのような錯覚に陥り目眩をおぼえた。

これは一体どういうことだ

頭を押さえてふらつきながら、台所へ向かう。

水を飲めば少しは冷静さが取り戻せるかもしれない。

「ひっ」

僕は思わずへたり込んでしまった。

台所の床全体が、いや、美しい白さが自慢だった壁までもが血で赤く染まっている。

そして、床にたまった血の水溜りの中心には男が倒れていた。だが、うつ伏せに突っ伏した状態で顔は見えない。首筋には刃物で切られた跡があった。

まるで夢の光景そのままだ

じゃあ、この倒れている男は

心臓が高鳴る。その男の顔を見てはいけけない。頭の奥で何かが警鐘を鳴らし続ける。見たら全てが終わる気がした。

だが僕は心とは反対に、床に溢れている血にまみれながら、這うようにして男の死体に近づいていく。

男とは数メートルしか離れていないのに、その時間は永遠のように感じられた。

そして、とうとう男が倒れている真横まで来た。

僕は唾を飲み込んで覚悟を決めると、男の衣服をつまむようにしてうつ伏せの状態から一気に仰向けの状態にひっくり返した。

「うわあああああ！」

僕は震え上がってそこから一步も動けなくなった。

男の顔はまぎれもなく、僕と全く同じ顔をしていた。

だが、それは僕ではないことがすぐにわかった。僕は全てを思い出した。

やっぱりあの光景は夢などではなく現実のことだったのだ。

そして、夢の中での視点が『殺される僕の視点』ではなく、『僕を殺す男の視点』だったというのも考えてみれば当然のこと。

なぜなら、殺されたのは僕じゃなかったのだから。

殺したのは僕。殺されたのは弟。

そう、あの光景は昨日言い争いの末に、僕が『僕と顔がそっくりな一卵性双生児の双子の弟』を切り殺したときの記憶だったのだ。

全てを悟って、僕は口をだらしく開けたまま、頭は真っ白になりそのまま動けなくなってしまった。

それから、どのくらいの間、そのまま弟の死体の横で座り込んでいたのだろうか。

ようやくはつとして、弟の死体もそのままに、僕はふらつきながらベッドに戻ることにした。

現実だと思っている今も、実は夢の中に違いないと確信したからだ。目が覚めたら死体などはどこにもなくて、弟が明るく「おはよう」といつものように笑いかけてくれるに違いない。

僕は「そうだ、これも夢だ、夢なんだよ」と一人呟きながら布団にもぐりこみ、眠りについた。

窓の外では雀がさえずり、これが現実の朝であることを告げていたが、僕の耳には全く入らなかった。

（完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5015a/>

悪夢

2010年10月17日03時45分発行